

江戸川乱歩とセルロイド

上の写真はセルロイドハウス横浜館 1F、お面の展示コーナーです。すべてが、セルロイド加工品です。天狗、ひょっとこ、お多福、鞍馬天狗、サンタクロース、だるま、鬼、日本の女の子、外国の女の子、ねずみ小僧など昭和初期に作られたものです。

日常使っているお面という言葉は辞書にはありませんが、仮面の項をみますと以下のようになっています。仮面（素顔を隠すためにつ



ける) 顔の形に作った、かぶるもの。面 (めん)。マスク
仮面をかぶる (本心、本性などを隠し、違ったものにみせかける)
仮面劇 (仮面をつけて演じる劇。わが国の能など)

仮面という言葉は、推理・探偵小説によく出てきます。推理小説の我が国の第一人者はやはり江戸川乱歩であると、思います。

2015（作年）9月春陽堂書店から、江戸川乱歩全 13 巻の文庫本が新しく発売されました。その第 10 巻が黄金仮面です。

この黄金仮面は、乱歩の昭和 5 年発表の探偵小説で、黄金の仮面を被った殺人鬼と名探偵・明智小五郎の闘いです。

このたび発売されている文庫本の解説欄に落合教幸さん（立教大学大衆文化研究センター学術員）が乱歩について以下のように書かれています。セルロイドに触れていますので、注目した次第です。

江戸川乱歩の最初の全集は、昭和 6 年の平凡社版であった。この全集の宣伝には、当時連載中の「黄金仮面」が効果的に使用されたのであった。

江戸川乱歩が雑誌「宝石」編集に乗り出したのは昭和 32 年、60 歳を過ぎてからであった。はるかに後になる「宝石」編集時もそうであったのだが、この昭和 6 年の全集でも、乱歩は編集だけでなく広告・宣伝にも気を配っている。

当時はまだ円本とよばれる安価な全集のブームが続いていた時期だったので、宣伝は大々的に行われた。広告が新聞各紙に掲載され、予約を募集している。この新聞広告の図案も乱歩が書いたものが採用されているという。

他にもさまざまな宣伝が行われた。

チンドン屋に黄金仮面の扮装をさせて街を歩かせる。ビルの屋上にアドバルーンをあげる。

セルロイドの黄金仮面を発売する。そのお面をビルの屋上からばらまく。その他、店頭にもノボリを立てたり、お面をつないだポスターを作製したり、いろいろな工夫でこの全集の宣伝が行われたのである。

江戸川乱歩が「人間豹」を書いたのは 1934（昭和 9 年）5 月でした。2008 年 11 月の国立劇場の歌舞伎公演では「明智小五郎と人間豹」が上演されました。

この長編小説の大筋は、レビュー会場に出没する豹のような顔立ちをした男が、レビューガールなどを誘拐しては殺す、心も豹のような男。豹のような男に立ち向かう正義の男、明智小五郎探偵の活躍が痛快です。

最近では、レビューという言葉に耳慣れしませんが、歌・踊り・寸劇・曲芸の諸要素やスピーデーな場面転換によってたくみに組み合わせて万華鏡に見せるはなやかな舞台芸術のことです。

この「人間豹」では、セルロイドに関して次のよう書いてありますので注目しました。

「レビュー仮面」。それはまったく奇態な流行であった。
人間というやつ、昔々から、生まれついた生地の顔を人前にさらすことを、ひどくはにかむ傾向がある。日本では頭被り、編笠、頭巾の類が、その時々の人間の顔を隠してきた。西洋でも、男という男がかつらをかぶった時代がある。女という女が厚いベールをかけた時代がある。仮面舞踏会などが人々に喜ばれるのも、花見の客に目かつらが売れるのも、同じ人間心理の現われにちがいない。

その人間の弱点につけ込んで考案されたのが「レビュー仮面」である。初めは不良少年か何かが、気まぐれに、おもちゃのお面をかぶって、レビュー劇場の客席にはいったのがきっかけであった。

一人まね、二人まねた、ちらほらと仮面見物が人の目にひくころには、機敏な商人が、「レビュー仮面」と銘うって登録商標を申請し、同一型のセルロイド面をどっと売り出したものである。

若い見物たち、ことに学生や小店員たちは、えたりかしこしと、このお面のカムフラージュによって、あこがれのボーイッシュ・ガールを、声を惜しまず声援することができた。はてはおとなの男女までも、少しばかり面はゆいレビュー見物のてれ隠しに、仮面を利用する者がぞくぞくとふえていった。

いまや「レビュー仮面」は時の寵児であった。発売元の出張所が劇場の入り口に設けられ、見物人は、切符といっしょに、そのセルロイド面を買わねばならないようなことになってしまった。

大劇場の観客席は、階上も階下も、まったく同じ表情した仮面の群衆によってうずめられた。見物席の何千人というおそろいの顔が、どんなすばらしい舞台よりもいっそうすばらしい見ものであった。

そのうえ、「レビュー仮面」の表情というものが、また、実に巧みにできていた。それはお神楽のお多福面をもっと男性化して、口を横に広く開いて、ニヤニヤと笑わせた単純な打ち出し面であったが、その笑い顔が、さもさもおかしそうな表情で、お面をかぶったどうしが顔を見合わせると、お互いのお面の中で、クツクツと笑い出さないではいられぬほど、真に迫ってできていた。

お面の流行が、劇場内の空気をほがらかにしたことは非常なものであった。舞台の踊り子たちは、いつも笑顔絶やさなかった。それに呼応するように、何千人の見物が、まったく同じ笑顔でニコニコと笑っているのだ。舞台も、見物席も、別天地のように明るくな

った。

お面のうわさにひきつられて、レビューきらいの人々までも、ぞくぞくと見物に押しかけてきた。どの劇場も、レビューとさえいえば満員であった。つまり、「レビュー仮面」は、もう今では、劇場経営者のマスコットとさえなってしまったのだ。

いや、そればかりではない。劇場内の「レビュー仮面」は、やがて徐々に街頭に進出はじめた。

銀座の夜をそぞろ歩きする過半の人々が、同じ笑いの表情に変わっていった。電車の中も、地下鉄の中も、同一表情の男女によってうずめられた。おおげさにいえば、東京じゅうが、同じセルロイドの顔で、にこにここと笑いだしたのである。

旧江戸川乱歩邸が、JR池袋駅から徒歩10分のところにありました。前側、左右両側が立教大学に接しています。乱歩邸の所有者が2002年から立教大学となり、運営管理を立教大学江戸川乱歩記念・大衆文化研究センターが行っています。(一般公開は水曜と金曜日、大衆文化の創刊号～13号を買いました)。



A=JR池袋駅西口より立教通りにある旧江戸川邸の案内標識です。梟(池袋・ふくろう)の像下に「うつし世は ゆめ よるの夢こそ まこと」の乱歩の句が彫ってあります。

B=旧江戸川邸入口、表札=平井太郎と平井憲太郎(孫・立大名誉教授)。赤色の建物は立大6号館。

C=邸内、3階建ての土蔵[蔵書を展示]。立木の隣は、立教のグラウンドです。

江戸川乱歩(実名・平井太郎)は1894(明治27)年10月三重県名張市に生れ明治45年に早稲田大学を卒業。政治経済学科で学びながら、エドガー・アラン・ポーやコナン・ドイルなど海外の探偵小説を勉強。卒業後は大阪、鳥羽を転々とし大正8年再上京。結婚してから文学や音楽に熱中。それから大正11年「二銭銅貨」で作家デビュー、「日本人初の推理作家が出現」と評判になりました。昭和38年、日本推理作家協会理事長に就任。1965(昭和40)年7月、脳出血のため自宅(写真C)にて死去。70歳でした(了)

2016年5月29日